年々の手応え

佐多稲子

講談社

年々の手応え

一九八一年六月一〇日第一刷発行

著者——佐多稲子

© Ineko Sata 1981, Printed in Japan

発行者——三木 章

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—一二—二一 郵便番号一一二 電話東京〇三—九四五—一一一一(大代表) 振替東京八—三九三〇

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——株式会社堅省堂

定価——一四〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にておとりかえいたします。

0095-183691-2253(0) (文1)

年々の手応え——目次

中野重治のこと

中野さんの全集について　11
入院中の中野重治　16
半年前のこと　20
病中に聞いた言葉　27
「驢馬」の頃　31
記録映画「偲ぶ・中野重治」　39
「梨の花」その他　44
年譜と古い日記と　55
中野重治の埋葬　59
ある狼狽の意味　64
事実探しで見えてくるもの　69

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

言葉のこと、など

「ろ」と「る」について　77
旅の感覚　80
テレビ　85
私の事情——修業時代——　93
至って雑駁な二、三のこと　96
一年の手応え　100
深夜の思いあれこれ　104
土門拳さんの艶　110
東大寺展を見る　114
チェーホフの短篇集　116

人の縁

柳瀬正夢をしのぶ　121
鷺の宮の縁——佐々木克子さんをしのんで——　124
迂遠な者の希み——河原崎長十郎さんのこと——　127
和田芳恵さんへの親近感　131
身近にそして豊富に——池田弥三郎さんのこと——　135
壺井栄——おおらかな精神の温かさ——　138
三岸節子さんの意欲　141
「石群」に寄せて——佐藤さち子さんのこと——　145
大宅壮一のおもいで　148

舞台雑感

初芝居、この十年　153
「アンネの日記」の感想　157
浅草のむかし話　160

女たちの足音

農薬裁判の意味　165
「働く婦人」編集の記憶——復刻に際して——　168
「プロ芸」復刻に際して——至って幼稚な思い出——　179
映画の三十年　185
憲法をひとりひとりの胸に　188

身のまわり

キモノの老女の話　193
感情移入のたのしさ　200
今日を弾む　203
十二ヵ月　214
それぞれの時間・人形の由来・故郷の顔・歌の真実・書くことが好き・お水取りに参詣して・花を胸にたたむ・見たもの読んだもの・土いじりと鷺草・精神に呼びかけるもの・陽ざしの語りかけ・手作りの情熱の意味
家賃――わが台所史の中心――　238
古さと新しさと　242
私の職業病　245
乱菊のいのち　248
子供の世界の流行　253

年々の手応え

装幀——辻村益朗

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

中野重治のこと

中野さんの全集について

『中野重治全集』が、あと第二十八巻の別巻を残すだけになったという編集部からの手紙で、よかった、という思いをする。よかった、という言い方は平凡だが、万事をこめてそうおもう。先ず、全集刊行中の中野さんのお疲れをおもうから、このお仕事を終えられることが嬉しい。全集刊行ということそれ自体が先ず、大きなお仕事であった。

昨年の夏、中軽井沢のお宅を私がたずねた日も、編集部の松下裕さんと机を間に差し向かいで調べものをしていられたが、それは終日つづくお仕事だったようだ。やはり同じ時のほかの日に原さんとの電話で、この日も松下さんが東京からおいでになる、というのを聞いた。中野さんの身体が気づかわれるときだっただけに、そういうことが心に残った。中野さんには作品のほかの仕事が多いが、それは編集の上で、一層こまかくなることでもあったとおもう。そういう内容の巻を読み返していると、何と多くのことに触れて書かれた、と改めての感動になる。

問題、事柄についての発言、指摘は私が言うまでもないが、人と、人の作品についてのものも大変な数に及び、私も幾度も書いてもらっている。これはプロレタリア文学の時代から、新日本文学会の活動における中野さんの立場というものを鮮明にすることでもあって、私などでさえもいちどその感を深くする。勿論これは、もっと広く文学、文学者について書かれたものと併せておもうことである。また第二十三巻の「国会演説集」では、中野さんにこの活動があった、と今更のように感銘が新たになるが、「在外同胞引揚問題いわゆる徳田要請事件に関する中間報告反対」では、この中の「菅証人」を思い出し、当時、中野さんとその人のことを話したのもおもい出す。

「菅証人」はこの事件の証人喚問中だったか、その直後だったかに自殺した人だが、その人の住所が当時私の住んでいた都下北多摩郡小平町にあると聞いていただけに、この人の自殺が身近に感じられて今も心に残っている。国会喚問中の民主自由党議員の質問が、新聞報道で読む限りでも、まるで、言葉の暴力というものを感じさせていたから、菅証人の自殺は、私の感じたこの、言葉の暴力に結びついて痛ましかった。この問題での中野さんの演説は、この調査の委員会の「下心があること」「多くの場合きわめて反動的な」やり方だったことを指摘して「亀沢証人」と「菅証人」との質問の際の手続きのちがいも述べ、中野さんらしい、整然としたこまかさだが、民主自由党議員を相手にした議会での中野さんは、身体がぎしぎし痛むような思いではなかったろうか。この国会演説の当時は、日本共産党がコミンフォルム批判を受け

入れるという事情の時期でもあった、とおもい合せる。全集というものは、読むものにも、それの書かれた時をおもい出させるのだ。

全集刊行でもうひとつ中野さんのお疲れをおもうのは「著者うしろ書」である。毎巻にこのうしろ書を添えられたから、そのお仕事で中野さんは、御自分のこれまでを何度も、行きつ戻りつされたことであろう。ここでも多くのことが新たに語られているが、こういう内容は事実に即さねばならないから、それを確かめたりもされただろうとおもう。兼ねてから中野さんはある問題なり事柄を取上げるとき、事実との照応を重視し、それによって一層論証を確かにする、という書き方をされるが、今度のうしろ書は、そういうことではなくても、しかし事実に即さねば、ということが多かったろうとおもう。私にも一度原稿の部分的複写がおくられてきた。それは、書いたことを一応、当の本人に知らせる、というものであったが、その原稿は複写のせいか罫は見えず、毛筆で書いてあった。この頃視力が弱くなっていられるせいかとおもったが、二十字詰、二十行でちゃんと書いてあって、それは、中野さんの視力を案じた私を幾分安心させた。この原稿の複写部分は、第二十一巻の「著者うしろ書」四二一頁の終りに近い行のあたりから始まって、次頁最後の、年月日までである。用紙の関係で、四二一頁十三行目から始まっているが、私についての部分は終りの一行目からであって、つづいて「宮本は麴町署に拘束されていた。これを引きだす計画、奪還策が立てられた。その仕事に宮本百合子、佐多稲子が参加していた」という内容である。それは、この中で中野さんが「きわめて最近まで

知らずにいたと言っていい」と書いているように、私が、この頃になって中野さんに話したことであった。中野さんはこの事実を、新日本文学会の発起人に佐多稲子が加えられなかったことに関係させて書いているが、中野さんとしては単に佐多についての事柄としてだけでなく、他に及ぶ考えがあってのことのようにおもう。この、他に及ぶとおもわれる事柄は、当時のひとつの方針も、今日との関連で中野さんに思い返される、ということのようだ。日本共産党の問題については、中野さんは今も常にそれを自分の問題とされていて、「著者うしろ書」にもそれは濃く現われているが「事はなかなか容易にはもどらぬと見えぬでもない」という言葉に出会うときなど、中野さんの気持をおもって私も辛くなる。

昨年、中野さんにもらったはがきで心にしみたことがある。事柄は私の個人的なことになるが、一九三七年四月の公判で私が判決を受ける日、柳瀬正夢が傍聴に来てくれて嬉しかった、というのを、やはり昨年私が書いた。中野さんのはがきはこれについてであって、自分の行かなかったのは何故だったろうと書いてあった。その何故、は私が、自分の公判を中野さんにも知らせなかったからだとおもう。当時の私は、自分たち夫婦間の暗い事情によろぼって自己を閉じ、公判にも虚無的になっていて、住いも近かった中野さん原さんにさえ、私はそれを言わなかったらしい。中野さんは今、そのことを気にしていられる。中野さんはこういうことにも心をくだく人なのだ。中野さんは近年、好物だったものが身体にわるく、原泉さんがこまかく気をつかっていられる。この状態について、いつか中野さんはこう言っていた。しかし、食べ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo